

四十四

和書門			
四	八	七	〇
函	架	冊	號
九	三	冊	架

內閣文庫			
四	八	七	〇
函	架	冊	號
二	二	架	冊

內閣文庫		
番號	和	48780
冊數	93(44)	
函號	149	112



武德編年集成卷之四十四

木村高敦 撰

慶長元 丙申年

正月小

○秀吉中甸ノ頃ヨリ東國ノ諸候ニ命ニ河内堤ヲ築カシメラルト云ク

○本多三弥正重 神君ハ復仕ス是人ハ譜代ノ臣トシテ軍功ヲ勵メスト云ハ氏永禄六 癸亥年一向宗ノ徒蜂起ノ時正重其棟梁タルヲ以テ翌年冬州ヲ退キ勢州ニ赴キ滝川一益ニ仕ハ其後

前田利家ニ属シ或ハ蒲生氏郷ニ倚頼スニ家ニ

於テ銳武ノ譽淺カラヌメ遂ニ恩許ヲ蒙ル所ト

本多佐渡守
正信ノ弟也

二月大

○二日 秀吉所勞ニ依テ候伯以下日々伏見へ

登學ス

三月大

○七日 秀吉病腦快驗諸人叅賀ス

四月小

○四日 畿内雪降ル冷ト下玄冬ノ如シ

○廿七日 秀吉土佐侍従先親カ亭へ来臨

神君及施薬院伴食ト云々路次ノ衛士六百人ト

五月大

○八日 神君正二位ニ叙シ内大臣ニ任シ玉ヲ

松平原次郎家乗從五位下和泉守ニ任叙ス此時

ニ至テ御家ニ侍従二人五位十八人ニ及ヘリ

○十一日 神君御叅 内是内府御轉任拜賀ノ

爲ナリ

○十三日 秀吉推子拾九午時ヲシテ龍顔ヲ

令拜卜テ 神君以下列候ヲ携ヘ朝參セラルル秀
吉父子 神君ハ牛車ヲ用テ拾九ヲハ其輔相
前田黄門利家技抱シテ同車ス納言ノ諸候ハ塗
樂參議中少將ハ騎馬ト云々拾九從二位中納言
ニ任叙アリテ諱ヲ秀頼ト称ス時ニ 神君ノ隨
身ハ永井右近大夫直勝松平右衛門大夫正綱内
藤右京進安成豊嶋主膳信満ト云々

○廿五日 江府ニ於テ 神君ノ切臣渡辺新左
衛門政綱初ノ名享年五十三歳ニノ卒ス
六月小

○廿日 神君ノ附庸野州下館主水谷兵部大輔
政村入道幡毫舟全珍卒ス享年七十
六歳ナリ

閏七月小

○十二日 夜子ノ刻五畿内大地震神社佛閣大
廈巨宅悉ク敗壞シ伏見ノ城中殿舎顛倒シ土裂
水涌出ス上臈女房七十三人奴婢五百餘人壓死
ス秀吉漸ク寢殿ノ庭ニ出政所松ノ丸ノ方ト共
ニ死ヲ遁レ玉フ千時加藤主計頭清正ハ石田カ
謨ニ依テ蟄居スル所歩卒三百人ニ棒ヲ持セ城
内ニ入寢室ノ庭上ニ臨メハ秀吉白洲ニ屏風ヲ

引セ女服ヲ著シ覆面メイ居セラレ尼孝藏主傍
ニ蹲踞ス政所清正カ疾来ルヲ悦テ孝藏主ヲ以
テ恩言ヲ岳レ玉フ清正カ曰微臣カ朝鮮ノ戦功
ニ於テ孰カ是ヲ争フ者アラシヤ然ルニ帰朝ノ
後石田小西カ讒間ユ一今ニ拜趨スルヲ得ス
其姦臣氏今夜誰カ君ノ危難ヲ救ハントスル者
アルヤト紅涙ヲ岳テ大ニ恨メリ秀吉敢テ其詞
ナシ

○神君ノ櫓門顛倒メ加々仇隼人政尚壓死ス殿
舎最モ大破セシム愛宕山ノ坊舎悉ク顛倒ス

○十三日 神君早朝ニ伏見本城へ御登堂庭上
ニテ秀吉へ御對顔アリテ 禁裏へ御使ヲ獻セ
ラレ然ル一キ由 仰セケレハ秀吉耳心セラレ
貴客ト氏ニ上京シテ 天機ヲ伺フヘシトテ
神君ト共ニ步行シテ出京シ玉フ時ニ 徳川殿
御家人ノミニテ秀吉ノ扈從微ニメ無キニ均シ
稻荷藤ノ表ノ辺ニテ 神君ノ御袖ヲ御家人等
是ヲ引コトニ度ニ及フ實ニ秀吉ヲ弑シ玉ハニ
トコノ時ニ在リト欲シテ也然ルニ一度モ後ヲ
顧視玉フト無シ秀吉久シクシテ步行シ大ニ勞

スルト称シ帯スル刀ヲ取テ其臣下ニ持セ玉ハ
ルヘシトテ神君ニ渡サレ則御手ニ携ヘラレ
既ニ二三町ニ及フ時頻リニ秀吉辞退アルニ因
テ彼刀ヲ井伊兵部少輔直政ニ渡サレ然レ秀吉
ノ従士逐ニ餘多馳着秀吉本多中務太輔忠勝ヲ
呼ニテ徳川殿ハ天下ノ黑白弁明ノ名将ニシ
テ卒尔ノ働キ無キコト吾能ク知ル処ナリ今
持セシト欲ス是汝弱年ヨリ忠臣勇士ノ名ア
ルニ依テナリ然ルニ徳川殿刀ヲ直政ニ渡シ
玉ヲ汝ナリ齒痒ク思フヘシ小氣者カトト笑ヒ

玉ヲ忠勝赤面シテ是ヲ謝スト云ニ秀吉叅
内ノ後洛外東山ノ大佛殿ニ詣シ破裂シ灵験ナ
キヲ怒リ矢ヲ発シ是ヲ射玉ヲ伏見ニ帰テ加藤
清正ニ對顔電遇昔ノ如シ

○廿日秀吉大地震ヲ恐レ其難薄カラントシ
欲シ本丸ヲ木幡山ニ移シ築カシメ今日事始マ
リ殿閣ノ柱三分二ハ石礎三分一ハ土中ニ其根
ヲ五尺堀入ヘキ旨下知セラレ極月晦日ヲ限り
新營ニ移徙有ヘキ間馬廻ヲ健士小身ノ族中間
ホニテ組々ヲ分テ夜以テ日ニ繼テ經營ノ切ヲ

勵ス一ト云々蓋シ應仁文明以來數百年兵革
連綿シテ漸ク天正十八九年ノ間ニ東奥ノ端
ニ于一統ニ平均シ海内枕ヲ泰山ノ安キニ措ニ
トスル処又朝鮮征伐起テ士民大ニ苦ム中ニ判
一伏見兩度ノ營構ニ困窮ニ悲ク豊臣氏ノ亡ニ
一ヲ度幾ハナル者十ク人望自然ニ神君ニ帰
スト云々

八月大

○十九日 大明朝鮮和好ノ使伏見ニ至テ著ス
○是月 甲斐庄喜右衛門正治享年六十三歳ニ

メ卒ス往年本國河内ヨリ乱ヲ避テ濱松ニ来リ
神君ニ仕テ實ニ楠河内判官正成カ末流ト云々

九月小

○朔日 大明ノ冊使伏見ノ城ニ登リ秀吉ハ謁
ス

○二日 秀吉明使ヲ饗宴アリ上檀ヲ秀吉ノ座
トシ下檀右ノ方ヲ冊使ノ席トシ左ノ方ニ

神君并利家等納言以上総テ七将ノ座ヲ設ク事
終テ二使客館ニ帰ル秀吉花園ノ亭ニ入兼元靈
山永哲ノ三長老ヲシテ大明ノ詔書ヲ讀シメ其

日本ノ國王ニ對スルト云詞ヲ怒リテ始メ小西
行長大明帝吾ヲ以テ明朝ノ王ニ對スヘシト堅
ク答フニ趣ヲ述ルニ朝鮮在陣ノ人數ヲ輒ク
歸朝アラシムル処今詔書如斯是小西吾ヲ欺ケ
リ朝鮮ノ和茂決メ許スヘカラス旨加藤清正及
ヒ三奉行ニ命テ清正始メ鎮西四國ノ大小名再
ヒ朝鮮ヲ可責由ヲ諭サレ明朝ノ冊使朝鮮ノ二
使忽チ追返ナレ

○八日 土州葛木濱へ臺船漂著ス是ハ延須臺
へ商賣ノ爲ニ渡海スル処逆風ニ臨テ撞折擱推

ケ水ニ渴シ且餓テ五百餘人死没シ残ル者三百
人ニ呈ラヌ國主長曾我部元親精米五十俵酒肉
ヲ贈リ水ヲ授ケ船中ヲ愛育シ輕舸ヲ大城ニ馳
テコノ事ヲ達ス秀吉則増田右衛門尉長盛ヲ輕
船ニ乘ラシメ土州ニ遣シ玉フ

○九日 長盛土佐ノ湊ニ於テ臺船中ヲ點檢シ
其在几処ノ綿子五万端金調純子五万端白糸十
六万斤印子千五百兩木綿六万端麝香一箱生
麝香十匹生猿十五匹鸚鵡三羽是ヲ収メ取テ船
百五十艘ニ遷シ大坂へ運送シ臺夷ニハ精米千

俵酒肉雜品若干ヲ授ク

○是月 長等山園城寺ニ秀吉ヨリ罪科ニ行ハ
ル族カ家賊ヲ藏ムル工ハ秀吉忿怒斜ナラヌメ
其僧徒ヲ放逐シ寺領ヲ勘落セラレ彼寺ニ秀郷
朝臣カ納ムル鐘近來撞ヒ鳴ラヌ此凶ヲ示スカ
ト巷説ス

十月大

○六日 土州ヨリ廻舩大坂ニ着岸シ壺舩没収
ノ品々秀吉ノ府庫ニ入ル処ニ禁瀬及公郷殿上
人且 神君等ノ諸將ニ配分アリ壺舩暨三十間

横二十二間八帆ノ柱風ニ折テ残ルニ抱餘十リ
秀吉下知セラレ舩悉ク修補ス翌月三月帰
帆スト云々

○十日 秀吉木幡山ノ本丸造畢ス
○家忠云此月太閤秀吉ニ井寺ノ僧ヲ追放ス
勘當ノ家人ノ賤ヲ家中ニ隱シ置ノ罪也ニ井
寺ノ鐘近來曾テ鳴ラヌ此凶ヲ示ス故欽

十一月小

○三日 蒲生秀行カ臣蒲生四郎兵衛郷安本氏
赤座
其政ヲ執ヘキ旨石田ニ成カ共謀ニ依テ秀吉ヨ
リ印章ヲ授ケテル

○牧野新次郎康成從五位下、叙之讚岐守、任
又故山城守成定カ子、
又右馬允卜諱同シ

十二月大

○五日 神君ノ部將久野民部大輔宗秀ト宅
弥次兵衛正次遺恨ヲ含メルアリテ鬪諍シ共
ニ死亡ス宗秀采邑一万三千石正次カ采邑二千
石是ヲ没収セテ然ルニ宗秀カ父ニ郎左衛門
宗能入道宗安老後ノ悲歎其沉淪ヲ憐ニテ下總
ノ内ニテ懸命ノ地千石ヲ賜フ

○廿七日 設樂越中守貞通初名称享年六十三

歳ニメ卒ス其子市左衛門貞信紫祿勤仕ス

○晦日 釣命ニ依テ松平丹波守康長カ娘十四時

歳戸田采女氏鐵左門一方嫁娶ス康長カ娘ハ

州東方ヨリ左年江府御城ニ

○是月 御家人神保惣右衛門政長卒ス

○是年 下野國宇都宮ニ郎左衛門藤原國綱實

子十キ工一宗徒ノ臣十人上京ニ淺野長政カ庶

子采女長次ヲ以テ嗣子トセンテ奉行中一願

望ス干時國綱カ弟芳賀左衛門兼綱十士ト不快

夕ル工一私ニ上洛ニ古例ヲ述テ芳賀ノ家ヨリ

國綱カ養子ヲ立ヘシ長政ノ末子ヲ家督ニセシ
下ハ國綱カ歿スル処ニ非スシテ長臣カ僭上ニ
出ル由ヲ訴ヘケレハ秀吉ハ宇都宮ノ本家豊前
ノ城井屋形常陸女朝房天正十六戊子年ニ亡ク
ル時ヨリ其東國ニ散在スル采邑國綱押領シテ
今ニ其事ヲ達セカレ下ヲ憎ムレケレハ熊ト芳
賀カ告ル趣ヲ許容セラレ右ノ十人ヲ芳賀ニ賜
リ罪スヘキ由密々ニ命セラレ芳賀愚ニメ是ヲ
察セス大ニ歡ニテ十人ノ内六人ヲ賜命ト称シ
洛ニ於テ是ヲ誅シ野州ニ歸テ殘ル四臣ヲ害セ

シムル而已ナラス其輩カ采地殘ラズ押領ス斯
テ秀吉ハ淺野長政ヲ以テ國綱カ常陸下野西國
ニ於テ十八万石ト書出セシ領分ヲ檢地セラレ
処ニ三十万石ニ余レリ爰ニ於テ國綱カ潛上押
領ノ地ノ罪ヲ称シ備前ノ國ヘ配流シテ其領地
悉ク叔公セラレハ曩祖宗圓座主還俗メ宇都宮
ノ家ヲ興シテヨリ當國綱ニ至リ此一世ニシテ
斷絶セシムト云

○秀吉ノ命ニ依テ會津ノ太守蒲生藤三郎秀行
初ノ名ヲ以テ神君ノ聲トシ玉フ
霍千代

○植村土佐守恭忠カ子帯刀康勝今年十九歳始
テ神君ハ拜謁ス

○松平右京亮康親ヨ召テ 釣命アリテ曰大番

預ハ先鋒ノ任タルヲ以テ有功ノ士ヲ撰ニテ是

ヲ掌ラシム當時一負ヲ闕ク汝ハ吾家族ニシテ

有司タラシム一カラスト云一凡其惡ニ當レリ

彼役ヲ勉メ懈ルヘカラナル由 御錠ヲ蒙リ康

親拜謝シテ勤仕ス

○池田三左衛門輝政カ弟備中守長吉カ嫡治兵
衛長幸九干時 神君并 台徳公ヲ拜謁ス從

台徳公新藤吾國光ノ昭差ヲ賜フ後備中守
ト称ス

○松平主殿ハ家忠カ嫡子又八郎 台徳公ノ御

前ニ於テ首服ヲ加フ 御諱ノ一字ヲ賜リ忠利

ト称ス且雲次ノ刀ヲ授ケラル後主殿
ニ任ス

○石川日向守家成カ嗣子宗十郎モ同時ニ元服

ニ 御諱ノ字ヲ拜受ニ忠綱ト称ス實ハ大久保

相模守忠隣カ二男ニテ家成カ外孫ナリ後任主
殿

○東奥松前ノ領主蛸崎伊豆守慶廣其子若狭守

盛廣始テ 神君ハ拜謁ス後松前ヲ以
テ家号トス

○杉原四郎兵衛正次御家人ニ列ス後年天下
一統ニ正次

カ曰領但州氣多郡八代

○藤方平九郎素生州ノ御家人ニ列ス下総須賀保

村五百石ヲ賜フ

○輕卒ノ隊長森川金右衛門氏俊所帯ニ依テ致

仕セス其與カ六騎徒同心五十人ヲ以テ嫡子氏

信ニ預ケテルト氏信モ又金右衛門

○大御番松平石見守康安カ組ニ雲新左衛門成

時ニ俸米五百俵ヲ賜フ

○信州ノ任士大井小兵衛カ子河内吉長入道満

雪且江州甲賀ノ産西尾猪兵衛正義ト氏ニ御家

人ニ列ス

○内田新六郎正成カ子平左衛門正世御扈從ニ

列ス

○木曾義仲十八世千次郎義就或ハ其叔父小笠

原内藏人ヲ憎メルヲリテ家臣千村山村ニ吉

殺シシム時ニ山村甚兵衛良勝初太刀千村平右

衛門二ノ太刀ヲ撃ト云々且兒小姓罪アリトテ

牛割ニスルヲ台聽ニ達シ木曾カ所領ヲ没収

セラレ遂ニ義就邊鄙ニ憂死ス其弟二人長次郎

義春與三次義通ト稱ス皆武田信玄カ外孫ナリ

義春ハ後年難波ノ役秀頼ニ属スト云々

慶長二丁酉年

正月小

○元日 神君伏見ノ営中一群臣恭賀ス遠州秋
芳部東照山平福寺薬師如来一御願書ヲ納メテ
此是 御自筆ト云々其紙表如左

息災長久 心中所願 眼病平愈

右於成就者堂建立可仕者也

慶長二年

正月吉日 内大臣家康

明 賀仁東於照須御威光誓伊於吾礼仁讓利玉江

屋

○家忠云元日伏見ノ城經始アリ去秋ノ大
地震ニ城中悉ク破壊スルニ依テ此度ハ所ヲ
轉メ高地ヲ撰ニテ是ヲ築カシム連年伏見ノ
城普請公役繁多ニ仍テ諸國ノ人吏大キニ困
窮ス

○同云元日加藤主計頭清正小西摺津守行
長纜ヲ解テ朝鮮國ニ赴ク諸軍勢ハ二月ニ至

テ渡海スヘキノ旨秀吉是ヲ指揮セラレ文禄
元年ヨリ慶長元年ニ至テ五年カ間相調ヘシ
和韓ノ會盟頗ニ破レ

二月大

○五日 渥美太郎兵衛友吉卒ス其父友久ハ今
以テ存生ナリ友吉カ子友景ハ是モ太郎兵
衛ト号ス

台徳公ニ仕ヘ後年紀陽大納言頼宣郷ノ附属セ

ラレ友景カ子ハ太郎兵衛ト称シ曾祖父ノ
諱ヲ冒シ友久ト号シ御當家ニ勤ム

○十三日 杉浦藤次郎時勝カ二男善次郎善成
後改吉武州都築郡鴨志田村二百石ヲ賜フ
右衛門

○是月 秀吉再ヒ其兵十四万ヲ以テ朝鮮ヲ討

ツ

三月小

○朔日 宇都宮國綱朝鮮ニ於テ功ヲ顯サハ食
邑ヲ賜フヘキ由秀吉ノ命ニ依テ騎士八十六人

雜兵五百十三人ヲ牽テ渡海ス

○十日 毛利參議輝元中納言ニ任ス

四月大

○武州上州ノ盜賊其張本十三人上州飯塚ノ一
屋ニ取籠リ兵悉ク以テ拒ントス那波ノ城主松

平和泉守家業カ弟左近直次時ニ二十一歳後ニ任縫殿以躬ツ
カテ進ニテ家内ニ入忽一人ヲ突伏一人ヲ搦
捕従者續テ競ヒ討テ或ハ殺シ或ハ捕エルテ総
テ十人ト云々僅ニ一人ハ遁レ去ル

○十九日 御家人山中左大夫助行初称卒ス

六月小

○二日 渥美太郎兵衛友久入道享年六十一歳

ニメ卒ス元勢州ノ産又賜シテ尾州ニ至リ
神君質子トメ熱田ノ加藤圖書順盛カ宅ニ寓居
シ玉フヨリ志ヲ竭シ且軍功アリ

○十二日 前筑前牧推中納言從三位兼行左衛

門督大江朝臣隆景逝去享年六十二歳十リ是ハ

十三州ノ大守毛利大膳大夫兼陸奥守元就ノ三

男ニテ小早川氏ノ跡ヲ統テ武畧雄謀入称アリ

小早川ハ平姓ニテ土 秀吉九州ヲ征シ筑前ノ國

肥實平ノ後裔十リ 封ス隆景恩賜ノ任重ヲ辞メ大政所ノ兄木下

肥後守家定カ庶子秀秋ヲ以テ嗣子トシ彼國ヲ

讓ル 秀秋モ左衛門督ニ 養ヲ以テ世ニ 秀秋ヲ金

吾黄門ト云フ

○十九日 豆州下田ノ城主戸田之助右衛門忠

次卒ス享年六十七歳

七月大

○十日 台徳公ヨリ南部山城守利直ニ尊簡ヲ投シ鞍五脊鎧五懸ヲ贈リ玉ヲ

○十五日 朝鮮國唐嶋ニテ船軍ニ敵舟數艘ヲ得タリ敵敗亡シ秀吉ノ水軍暇坂中務少輔安治

戰功ヲ勵ス下ヲ稱シ 神君台簡ヲ投ケラレ
○十八日 去秋洛陽ノ大佛殿大地震ニ破裂シ

秀吉是ヲ見テ云ク佛像ヲ安置スルハ衆生濟度ノ爲也其身ヲタニ保テ得ル下無ク摧裂メ何ノ

利益カアラント云テ自ラ弓ヲ引テ是ヲ射テ大

佛ノ像ヲ取捨テ秀吉怒テ重テ佛閣ヲ造営シ信州善光寺如来ノ像ヲ大佛ニ代テ安置セシ爲ニ

今日彼如来ノ像上京アリ歩卒ヲメ是ヲ擔ハシメ洛中ニ練歩シ大佛殿ニ是ヲ置去レハ諸宗ノ

貴僧相集テ是ヲ供養ス
○是日 西郷彈正左衛門家貞享年四十二歳ニ

メ卒ス嫡子孫九郎忠貞襲祿スト云
○十九日 備後鞆ニ於テ前征夷大將軍從三位

守權大納言源朝臣義昭郷逝去
于時六十一歳其
靈陽院ト謚ス其

子二人往年信長是ヲ釋門ノ徒ニ入シム圓滿院
義尊實相院常尊是十リ

八月小

○八日 前武州鉢形ノ城主北條安房守氏和加
州ニ於テ蟄居ス

九月大

○加賀中將利長參議ニ任シ從之位ニ叙ス

十月小

○二日 永井安右衛門尚家卒ス是嚮ニ參陽大
濱辺租税ノ事ヲ司ルト云々其子新八郎ハ當時

關東ノ内貢税ヲ沙汰ス

十二月小

○三日 秀吉德善院玄以ニ命シテ江州ハ
帝都ノ辺境然モ一起蜂撥ス一キ地々ハヲ以テ
彼國ノ舊城ヲ破却セラル

○十二日 台德公武陽稻毛ノ邑ニ於テ放鷹セ
ラル所ニ疔瘡ヲ患ヒ玉ヲ則老臣羽書ヲ伏見ニ
發ス

○十七日 江府ノ羽檄伏見ニ至ル 神君永井
弥右衛門白元後改ヲ以テ 台德公ノ病腦ヲ訊

玉ノ白元即日伏見ヲ發ス

○廿日 永井白元昼夜四日ニメ武江ニ着シ

台徳公ノ御前ニ於テ 鈞命ヲ述ル其速ニ来著

ヲ感シ玉ト時服ヲ賜リ伏見ニ還シ玉ヲ大久保

治部少輔忠隣 御旨ヲ傳達ス

○廿五日 永井白元伏見ニ還リ 台徳公痘瘡

段々清快ニ赴キ玉ヲ由言上ス 神君其往來ノ

速ナルヲ感セラレ

○廿七日 御當家草創ノ切臣上州白井ノ城主

本多豊後守藤原廣孝享年七十歳ニメ卒ス

○是年 台徳公ノ姫君誕生シ玉ヲ酒井河内守

重忠墓目ノ役ナリ成長ノ後豊臣秀頼ニ嫁シ彼

生害以後本多中務大輔忠刻ノ室タリ忠刻没後

薙髪シテ江城北ノ丸ニ住居シ玉ヲ天樹院殿是

ナリ

○神君ノ御外孫奥平忠七郎忠政ヲ以テ上州吉

井ノ邑主管沼大膳亮定村始ハ称カ養嗣トシ二

万石ヲ興奪ス後ニ濃州加納ノ城ヲ賜リ松平根

津守ト称スルハ此忠七郎ナリト云ク

○山口修理亮重政カ子熊丸重信僅ニ八歳ニシ

于 台徳公ヲ拜謁シ 仰ニ依テ長次郎ト改ム
後任伊豆守

○勢州ノ浪客保々長兵衛則貞當時加藤清正カ
臣加藤百女忠就カ許ニ賓客トメ寄食スル処津
田小平治長興執達ヲ以テ 神君御家来ニ列シ
米地千石ヲ賜フ

○甲陽武田典厩信豊カ舊臣青木尾張信治カ養
子清左衛門御家人ニ列ス 實ハ落合常陸カ次子ナリ

○江州勢田ニ於テ青木左衛門ト云フ士父ノ
讐同苗左京ヲ討捕干時御家人義濃守清洲之助

茂朝カ子助ニ郎茂次荷擔ノ科ヲ立奉行ヨリ御
當家ノ老臣ニ断リ誅セラルヘキ旨ヲ述ル

○伏見ニ於テ御家人高橋金七郎ト大谷刑部少
輔吉隆カ郎從鬪諍ス干時安藤次右衛門定次カ
三男左衛門一勝助太刀シテ大谷カ士ヲ斬ラシ
メ逐電ニ遂ニ安藤ハ前田利長ニ仕メ元和難波
ノ役ニ軍功アリ

○越前秀康主二男虎松生ル 後ニ伊豫守忠昌ト称ス

○総州相馬ノ邑主土岐山城守源定政享年四十
七歳ニメ卒ス是ハ菅沼藤藏ト称シ知ヨリ

神君一仕一勲切ノ臣ナリ其子與止郎定義後山
城家督ヲ嗣テ一萬石ヲ領スト云々

慶長三戌年

此年ヨリ慶長六辛丑年ニテノ間愚著
述セシ武徳安民記三十記卷ニ明備又
ル工一此書ニハ其大畧ト且ツ聊カ彼
書ニ漏タレ事ノミヲ記ス處ナリ

正月大

○神君伏見ノ御館ニテ歳首ノ賀儀例ノ如シ昨

夜御靈夢ノ告アルニ仍テ雄徳山八幡宮へ詣テ

玉ヲ今夜於武江ニ御家人米津清右衛門清勝カ

婢女一首ノ倭歌ヲ夢レ

盛リ十レ都ヲ花ハ散果テ吾妻ノ松ヲ世ヲハ

継キケル

○七日 幾内大雪降レ

○九日 秀吉蒲生家ヲ再ヒ憎メルコトアリテ

藤三郎秀行ノ領知奥州ノ内二十郡羽州長井二

郡總高九十一萬九千石ヲ放テ野州宇都宮新

撿地高十八萬九千石領ヲ授ケラレ

○廿四日 秀吉ヨリ上杉中納言景勝カ舊領ノ
越後一國信州川中嶋四郡ヲ轉シ奥州ノ内二十
餘郡羽州長井二郡并先知佐渡一國羽州庄内三
郡共ニ總テ百三十一万八千石餘ヲ賜リ會津ニ
在城大湫久太郎秀治カ越前北庄二十九万八百
石ヲ轉シ其附庸溝口村上ト凡ニ越後一國ヲ賜
リ從五位下ニ叙シ侍從ニ任ス其臣近藤織部正
重勝一万石ヲ賜リ秀吉ハ直勤ス或ハ三月廿四
日ト云フ説モ
リ

○晦日 遠州久野ノ城主松下石見守之綱享年

六十二歳ニメ卒ス法諱是ハ若狭守長利カ子ニ

メ始メ加兵衛ト稱シ秀吉弱年ノ時ノ主人ナリ

○是月 伏見ニ於テ堀久太郎宅失火アリ岐阜
黄門秀信ノ館類焼シ丹後少将忠貞ノ營殆シ干
時加賀利家郷老裏ト云ハ凡斯ウカラ三千餘人
ヲ牽テ馳至リ細川ノ宅焼ル時ハ餘煙城中ノ殿
舎ニ及ハント察シ自身屋上ニ登リ從者粉骨ヲ
竭シ火ヲ鎮ム

三月天

○十五日 秀吉洛陽醍醐ニ遊テ花ノ宴ヲ催シ

玉ノ今日前ノ江南ノ領主佐々木六角正少弼
源義賢入道撥関弁義禎流宰憂死ス

四月小

○六日 加賀黄門利家従二位ニ叙シ大納言ニ
任ス

○下旬 秀吉ハ石田三成ヲ召テ昔朝鮮ノ軍ニ
倦ミ聞テ厭テ汝肥前名護屋ニ下リ軍ヲ沙汰
ス一キ旨命セラルニ成望ク辞スレ氏許容ナシ
ニ成遂ニ領掌シ退出ノ後長束正家大谷吉隆カ
方ニ赴キテ予築紫ニ至ラハ其跡ニテ謨問ニ陷

ル一ニ深ク慮テ其深ク償ヒ賜ハル一ニト云ク

五月大

○三日 秀吉朝鮮在陣ノ加藤左馬介嘉明カ功
ヲ賞シ三万七千石加恩セラレト云ク

○五日 端午ノ出仕畢リ秀吉病ニ嬰リ玉ヲ養
安院脉自伺ヒ平脉ト甚ク畢ナリ衆醫ノ了簡ヲ
問ハル一キ旨ヲ演テ藥ヲ獻ス洛ヨリ召ニ應シ
夜中ニ通仙院施藥院竹田法印馳至テ病脉ヲ伺
ヒ其謂テ処符合ス

○七日 秀吉所勞甚ク重シ昨夜中ニテ養安院

薬ヲ服用セラシ其効驗更ニ無キニ一養安院衆
醫ト昏儀シ今晝夜加減ノ薬ヲ進ム

○八日 秀吉竹田法印カ薬ヲ服用ト云

○十一日 石田三成出京メ鎮西ニ赴ク

○六月廿日 秀吉洛陽大佛殿再興供養ヲ遂行ル

○下旬 秀吉病腦益々重シ最モ虚損ノ症也ト

○六月小

○二日 衆醫群衆シテ秀吉ノ脉ヲ伺ヒ療養ニ
及ヒ難シト云

○十六日 秀吉逐日肉脱シ飯食減メ病劇シ淺

野前田石田増田長束ノ五人ニ命メ曰余聞諸牧

伯麾下ノ士ト多ク怨恨アリト是太々不可ナリ

今ヨリ後ハ相互ニ恨ヲ忘レ歎ヲ結ニテ相共ニ

秀頼ヲ保護シテ可ナリト五人其旨ヲ衆人ニ傳

フ衆皆曰心ヲ一ニシテ嗣君ヲ仰リ奉ニテハ誰

カ異心ヲ存セニヤ然レトモ衆人私怨宿恨ハ各

存念アレハ命ニ從テ和平ハ不可成ト云秀吉

聞テ驚キ神君ニ告テ曰内府願クハ衆人

恨和シ玉一ト於是神君候伯諸士ヲ會シテ秀

吉ノ命ヲ傳ヘ相共ニ和睦セシメ
ス其答フル下前ノ如クニシテ恨ヲ解ヘキ氣色
十ニ神君ノ曰諸君嚮ニ太閤ノ命ヲ受テ心一
ニシテ忠ヲ竭シテ嗣君ニ仕ヘント云キ夫忠ヲ
盡シ公ヲ奉セハ何ソ私ノ怒ヲ念ケンヤ若尚互
ニ雙隙ヲ成サハ此各異心アルナリ心ヲ一ニメ
忠ヲ竭スノ謂ニアラス嗣君ヲ奉スルノ後安ク
シカアルヤ諸君ノ言何ソ前後相違スルヤト色
憂シ言ヲ勵シ諭シ玉フ衆人其理ニ服メ異言ア
ルナク相共ニ對テ謹テ命ヲ奉ラントス

神君是ヲ報セラル秀吉悦ヒ於是讌會ヲ設ケ候
伯諸士ヲ饗シ共ニ交歡ヲ結ハシメ玉フ然レモ
衆人ノ意更ニ解スシテ色ヲ和ケ詞ヲ交ルナク無
シ神君劍ヲ按テ起立シ玉ヒ怒テ曰諸君何ソ
昔ヲ欺クヤ嚮ニ諸君私ヲ忘レ公ヲ奉シテ嗣君
ヲ助ケト謂ヘリ我其言ヲ報ヤリ故ニ太閤欣
喜シテ今日ノ歡會ヲ成サシム諸君獻酬歡和ノ
態ナク睚眦忿爭ノ氣アリ此諸君昔ヲ太閤ニ責
ナリ座中ノ又ハ皆吾敵ナリ神覽上ニ在リ一人
ヲモ脱スニシテ宣フ衆人其威信ニ服シテ滿坐

寂然トシテ屈服ス時ニ中村一氏遠野長政前田
玄以進出テ調和シケレハ衆人俯伏ノ其罪ヲ陳
謝ス

○同日夜ニ入嘉祥ノ祝アリ秀吉ハ上段禱ノ
上ニ蒲団ヲ布テ着座秀頼其傍ニ侍座セラレ其
下段中央ニ片木ニ色々ノ菓子ヲ積ニテ並ニ置
此席ハ中老ニ奉行近習ノミ出座シテ是ヲ頂
戴ス其餘每席如是ノ品々ノ菓子積ニ置宮職ノ
高下ニ依テ其席ヲ異ニシ皆菓子ヲ得テ退ク
恒例ノ如シ秀吉中老奉行ニ向テ曰吾願フ處ハ

秀頼十五歳ニ及ハ、海内ノ政ヲ讓ント欲スル
下日アリ渠天下ヲ管領シ此嘉儀ヲ成ス下見
ハ吾本懐タラン吾命既ニ以弱ントス遺恨少カ
ラストテ落涙アリ伺候ノ輩涕泣シテ退ク其容
色ヲ見ル者秀吉薨逝カト称シ親族朋友ニ告ニ
ト欲シ京伏見大坂ノ間飛使殆ト絡繹タレ故欲
亥ノ刻伏見中大ニ騒動ス

○十七日秀吉神君ハ對顔シ昨日諸將和融
ノ時威嚴ナリ下ヲ感セラレ

○廿二日嚮朝鮮ヨリ飯朝ノ名詣ヲ執

ル中ニモ毛利甲斐守秀元恩言ヲ蒙リ今日又
藤堂佐渡守高虎カ軍切ヲ賞シ一万石増封セラ
ル総テ八万石ト成且ツ暇坂中務少輔安治ニモ
三千石加一賜フト云

武徳編年集成卷ノ四十四終

